

史料紹介

「佐野栄壽左衛門海防二関スル意見書」

金丸智洋

解題

一 はじめに

佐賀藩は、江戸時代に福岡藩と共に長崎防備を申し付けられていた。フェートン号事件での失態以後は強い危機意識を持って藩政改革を断行した。長崎に隣接する地理的条件を活かし、西洋の医療・軍事に代表される科学技術研究は、多方面で成果を出した。その最たる実績が佐賀藩海軍であり、日本海軍の前身の一つとなった。

しかし、佐賀藩の科学技術については未だ不明な点も多く、佐賀藩の科学技術を知る上で欠かせない大正・昭和戦前期の労作、秀島成忠『佐賀藩海軍史』(一九二七)、同『佐賀藩銃砲沿革史』(一九三四)は、杉本勲氏が「佐賀藩蘭学史の研究」において述べられたように現在の観点からは記述内容の出拠が不十分であるため内容の実証が問われている。

そこで本稿では、佐賀藩海軍の設立に大きな役割を果たした、日本赤十字の前身・博愛社の創設者として知られる佐野常民(栄壽左

衛門)の史料について、翻刻を兼ねて紹介を行うこととする。

二 書誌事項について

本史料の表題は『佐野栄壽左衛門海防二関スル意見書』(鋼3 58・19 04・51)である。財団法人鍋島報效会所蔵であり、現在佐賀県立図書館に寄託されマイクロフィルムでも閲覧できる。法量は縦14×横38センチ(ミリ単位切上)、長帳四丁、右上綴である。右下に「鍋島家蔵」の朱印と縦14×横4センチの付札があり、そこに「佐野栄壽左衛門海防二関スル意見書」とある。史料の状態は虫損等も無く極めて良好である。

この史料は、後世につけられたであろう表題とは違い、「海防二関スル」意見書という印象はあまり受けない。また、年号が辰三月となつている。

実際目録でも辰三月(安政3年カ)となっており、他の研究機関による調査では、九州大学と東京大学の調査が挙げられる。九州大学デジタルアーカイブでは作成年代は不明、内容注記で「辰三月(安政3年カ)」とあり、東京大学史料編纂所の維新史料部が一九七八年に行つた佐賀県下幕末維新期史料調査では「12/621 佐野栄壽左衛門意見書(辰三月)(四枚綴)三通」とあり、東大史料編纂所は「海防二関スル」が除かれている。確かに佐野による三重津での洋船建造に關しての実務的文書といった印象が強い。

時期は、天保十五年(一八四四)や慶應四年(一八六八)も考え

られるが前者は佐野が勉学で佐賀に不在の頃で、文中に登場する精錬方が設置される前である。後者は佐野が渡欧していた頃であるなどの理由から、安政三年(一八五六)と考えて間違いないであろう。

### 三 内容について

本史料の凡その内容は次のとおりである。

① 出島の蘭人が製造したバッテリー(小船)をまねて稽古にもなるので一艘造りたい。造るに当たっては「まつら」(竜骨)、「にうし」(水押し船首材)用の楠木は三重津で確保している中から利用し、不足分は精錬方の名において諫早から伐採してくること、人員をすぐ呼び寄せること、優先して利用し費用は深堀元方より九十両取替える。辰三月

② 中村らの旅費、石黒の分も同様に差出すこと。蒸気船(スンピン号||観光丸か)に差出してある火焚の者の賃金を早めに払うべきこと、蒸気船雛形製作に向けて七十両を差出し、伝習中の絵図面ならび雛形制作に向けて二十両。

③ 先般のバッテリー御改正につき精錬方に相談して煮詰めたティール(タールのことか)二十貫目、銅版百枚、銅釘一万五千本、煮油一斗、バッテリー(小船)の「まつら」(竜骨)用の曲木は三重津の脊板等の内より仕向ける。

④ 精錬方から工具を仕向け大工や職人を製造に当て費用は九十両。バッテリー御用方から礎を差出させる。

⑤ 深堀御船屋にあるバッテリーの「巻はた」などの修復費はおよそ十両、急いで修復した後、帆道具その他を伝習方へ差出すこと。

以上史料から見て、断片的ながら佐野による実務の順序は勿論、実船を造る際に雛形を作る例が確認できる。

また注目すべきは精錬方の「中村幸輔(奇輔)」と「石黒寛次(貫二)」が登場することである。兩人とも佐野が京都から招聘した科学者で化学や蘭語を得意とした。

### 四 おわりに

一八七四年(明治七)の「佐賀の変」では佐賀城の史料も多く焼失した。その後、鍋島本家に分家や家臣など他家から史料が多く移管されたようで、「鍋島家蔵」印と同時に別家の印が入っている例がある。明治以降に移管・整理が行われた史料も以前の所蔵先を特定することが可能であり、今後は鍋島家だけでなく、これら移管史料の本来の構造を分析し、復元することが極めて重要である。そうすれば、史料が真価を発揮するようになる事が大いに期待できる。

註

- (1) 杉本勲「佐賀藩蘭学史の研究―精練方の動向を中心に据えて」(『九州文化史研究所紀要』第15号・昭和45年3月) 78項
- (2) 杉本氏同掲論文にて既にご指摘の通り、秀島氏自身も『佐賀藩海軍史』の冒頭「附言」2項において「藩政時代ニ於ケル重要記録ハ不幸明治七年佐賀ノ亂ニ兵燹ニ罹リ、加フルニ佐賀城倉蔵ノ焼失ニ依リ鍋島公爵家亦此種ノ記録文書ヲ保存スルモノ少ナキハ」とあり、戦乱による史料焼失を問題視している。
- (3) 村山和彦編『佐賀県立図書館所蔵鍋島文庫目録郷土資料編』1980年
- (4) 中野禮四郎編『鍋島直正公傳 第五編』283項の文久二年(1862年)の記述で「中村奇輔は前年火傷にて廢人となる」とあり、今回の意見書がこの年以前のものであることを補強する。
- (5) 本多美穂「石黒直寛関係資料について」『江戸のモノづくり研究会会報』(vol. 12・2007. 12)にて直寛を名乗る前は貫二が正式で寛二、寛次とも表記することが述べられている。
- (6) 杉本氏同掲論文にて既にご指摘の通り中野禮四郎編『鍋島直正公傳 第四編』において「中村は、洋籍の図説を見る毎に輒ち意匠を凝らして之を造り試みんと企つる豪胆なる志望を具したり。石黒は図説によりさらに相互考察して之を究めむとする探究心を有し、知識透徹にして而も精根の強きこと非常なりき」とある。
- (7) 串間聖剛・中野正裕著「御側外様諸役調子写」『ゆけむり史学』(第2号)に「鍋島家蔵」の印と「清陰家蔵」の割印が押されているが、こ

れは本史料が、明治七年(1874)の佐賀戦争で焼失した本藩の記録を補うために、須古鍋島家から移管された文書のひとつであることを示している。」と述べられている。

凡例

- 一、漢字は極力原表記に従った。
- 一、草仮名は現用かなに置換した。
- 一、合字はカタカナで表した。
- 一、字画の不明瞭は「■」で表した。
- 一、人物名、地名、固有名詞は囲み線を入れた

附記

本史料の翻刻に際し、御高配を賜りました(財)鍋島報效会ならび大園隆二郎氏に対し厚く御礼申し上げます。

史料

(附箋)

「佐野栄壽左衛門海防二関スル意」

口達

今般相於出島蘭人製造

いたし候 ハツテイラ 乗試

川敷輕并にして船定も強ク

別而出来立宜殊二帆寄其下

事變候付右を形二いたし

此御方二も老艘御打建

相成間■哉左候得者仮

まつら 等も其假貸与候

可申与傳習之節船持ヨリ

應々相勤申候就而ハ其通

御座候得者蘭人製造之

船形をも相移シ第一

製作中不分之廉々等時々

致質問候得者則極稽古之

為二も相成茂二候条早速ヨリ老艘

相打建相成方二ハ有御座間敷哉

尤打建場其別段小屋懸等

いたし候而者御不弁利之筋

二付当御屋敷外御蔵所

應先二庵居相整方二者

有御座間敷哉惣而差付

より懸候得者当地

御越迄二者成就可相整二付

急速左之兼々御手当

相成度候

一まつら用楠木当地二而

相弁兼候付 三重津 御困

相成居候林木之内と脊板等

蒸気船御打建之御用二

相成兼候分急々御積廻

相成度事

一 こうし 用楠囲木老本

右者別而差急候付 精鍊方 ヨリ

御引付相成居候囲木早速

諫早ヨリ陸地二而御差廻相成

度候事

一大工小頭忠助并大工五人

鍛冶文蔵外老人急々

差越相成候事

一御打建用人金銀伐木代

并手間■等其外取来

凡積前正金九拾両 深堀

元々方ヨリ取替にして被差出

追而入切を以趣方相整

方二者有御座間敷哉於

然者其段其筋江應二被

相度達候事

右之通致御達候条猶又宜

被逐達御吟味候已上

辰三月 佐野栄壽左衛門

一 中村宰輔 中村宰輔其外逗留銀

并出達御合力等去旨

石黒元次 江被差出候見合

を以当節同様被差出様

旧冬致御達致候急二相濟

候様之事

一 献貢蒸氣船差出置候

火焚之もの賃銀最前

致御達置候通急々相濟候様

之事

一 小郡松五郎 内実難渋

二付貯男耆人ヨリ差出度

一 福谷啓吉 江貯男ヨリ差出

度最前致御達置候通急々

相濟候様之事

一 蒸氣船機関其外難形

製作二付今又正金七拾両

被差出候様最前致御達置

候通急々其筋被相達度候事

一 傳習中時々絵図面并難形等

製作二付正金式拾両被差出

候通致御達置候通急々

其筋被相達度候事

一 傳習方 二付御屋敷納方

其外殊更御屋代中格別

骨折殊二諸家中談等二而

内輪難渋之筋も不少二付

御合力被差出候様旧冬致

御達置候通急速相濟候様

之事

一 先般御製造之バツテイラ

御改正二付左之品々精鍊方  
御相談被<sup>(成カ)</sup> 急速仰仕向相成  
度候事

一 <sup>(但素詰)</sup>  
テイル 式拾貫目

一 銅板百枚

一 銅釘老万五千本

一 煮油耆斗

ル

一 当節致御達候バツテイラ

御製造二付左之通急二

御手当相成被候事

一 まつら用曲木三重津

御開之内脊板等之内ヨリ

急々御仕向相成度事

一 精鍊方ヨリ御引付相成居候

雖并かすがい等御仕向

相成度事

一 大工小頭忠助并材木町

伊兵衛四人将又金具師

長瀬町伊兵衛兄弟急々  
被差越度事

一 右製造用入具銀

正金九拾兩最前致

御達置候通急々其筋

被相達度候事

一 バツテイラ用御番方

有之候碇被差出度候事

一 右製造二付爰元御門番

足輕 大塚全衛門 義一順

懸合被仰付度候事

一 深堀御船屋二有之候バツテイラ

巻はた其外修覆入具銀

凡拾金程二而出来立候由

二付急々御修覆相成魔風之

帆道具其外被相用一順

傳習方江拝借被差出度候事

史料註

ハツテイラ ポルトガル語で Bateria オランダ語で Bateria で、短艇つまりボートのこと。日本では、幕末期に洋式帆船の技術導入とともに入ったので、外国の呼称がそのまま使われた。(『ブリタニカ百科事典』)

まつら 船体の補強用として(かわら航)・棚板・戸立などの大板部に入れる角材(中略) 西洋型船やその技術を入れた船体構造では龍骨とともに主要構成材をなす。(『日本国語大辞典』)

三重津 佐賀城南東約六キロメートルの地で早津江川に臨む。元来船蔵のあった場所で、安政五年来船手稽古ところや造船場を設け、佐賀藩海軍の根拠地となる。現佐賀郡川副町早津江。(『幕末軍事技術の軌跡』)にうし 和船の船首材。水押(みおし)のこと。(『日本国語大辞典』)

精錬方 嘉永五年に新設、蒸気機関や火薬等の化学、電信機の実験などが行われた。(『直正公傳』)

諫早 江戸時代佐賀領に属し、長崎街道の宿場、港から佐賀へ海路でも行ける交通の要地であった。(『幕末軍事技術の軌跡』)

深堀 長崎湾の東岸、湾口に近い村(現長崎市)。早くより佐賀藩家老深堀鍋島家(六千石)の領地で、藩の船蔵をおく。(『幕末軍事技術の軌跡』)

佐野栄寿左衛門 常民(1822-1902)。佐賀藩士。切米七十石。佐賀城下枳小路住居。大石衛門組。足軽二拾五人組与。海軍方ヨリ精錬方兼帯。(『佐賀県近世史料第1編第5巻』)

中村奇輔 京都出身。広瀬元恭門下で薬学に詳しく佐野栄寿に招かれて佐

賀に来る(嘉永四年)。蘭学寮に出仕し翌年精錬方が設立されるとその中心人物の一人となり、特に理化学および機械製作などに従事、電信機も製作した。実験中に事故にあい、研究不能となる。(『幕末軍事技術の軌跡』)

石黒貫二 京都の広瀬元恭で医術と理化学を学ぶ、佐野栄寿に招かれ佐賀に来る。精錬方御雇となり、汽船・電信機などを研究、蒸気機関の政策に当る。(『幕末軍事技術の軌跡』)

小郡松五郎 水主。後に飛雲丸乗組(『有明町史』)  
福谷啓吉 三河の人。召抱えられて精錬方で勤務。安政二年長崎海軍伝習生。万延元年遣米使節に随行した。(『幕末軍事技術の軌跡』)

テイル 不明。タールのことか。  
大塚全衛門 (全右衛門) 勢屯町(現・白山二丁目) 足軽(『佐賀県近世史料第1編第5巻』)